
カノン～君といた日々～

玲風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カノンと君といた日々

【Nコード】

N0601B

【作者名】

玲風

【あらすじ】

性格を偽り、過あさはらしぐす朝原紫央の前に転校生、桜木花音さくらぎかのんが現れる。彼女はすぐに彼の性格を見破った。紫央はだんだん花音に惹かれていく…

第1話 好青年VS転校生

俺達の恋には期限があっただ

「今日はみんな知っている通り、転校生を紹介する。さあ、入れ。」
熱血顔の担任、山口が黒板に大きく転校生の名前を書いていく。その文字は癖のある字で少し読みにくい。桜木花音^{さくらぎかのん}。そう読み取れた。俺を含む殆どの男子は朝からソワソワしていた。みんなで転校生がどんな奴か賭けた。俺のダチは、がり勉orブスに賭けていた。あんまり親しくない奴らも入ってきて、「じゃあ、俺は眼鏡さん。」などと言っただけかなり盛り上がった。肝心の俺は『ロングヘアーの可愛い奴。』と冗談交じりに賭けた。賭けた金は1000円。負けたらペアだ。

入ってきたのはロングヘアーのどっちかって言う可可愛い方だ。よしっ。賭けは俺の勝ちだな。

「桜木花音です。よろしくお願いします。」

爽やかな声で挨拶する桜木花音。ラッキーなことに彼女の席は窓側の一番後ろに座る俺の横となった。まあ、どうでもいい。今の言葉が俺の本音。クラスの奴らとバカ騒ぎしてれば俺の居場所が確保できる。傷付かない。仲良しごっこをしてれば嫌われない。俺はそんな奴だ。

カタッ

桜木花音が席についた。

そして俺のほうを見ている。

「桜木花音です。よろしくね。」

「は？何で自己紹介すんの？さっき教壇とこでしたじゃん。俺はそんな耳悪くないって。」

にこやかに笑う俺。これは必須条件。どうでもいいのに変わりはないが、好印象を与えておいて損は無い。

彼女もアハハと笑った。かわいいのは本当だ。でも、あえて言うなら『天然』だろう。間違いない。

不意に俺の前の席の加藤が顔を向けてきた。一番仲がいいと言える奴だ。目的は勿論俺じゃなくて桜木花音。

「ねえっオレ加藤祐樹かとうゆうき。よろしくっ。花音ちゃんめちゃくちゃかわいー！彼氏とかいないんだったらオレなんかどう？絶対オススメ！」

「祐樹、自分で言うなよ！バカ丸出し！」

こういうツツコミは毎回事のこと。実際はめんどくさいんだけど…。

「ていうか、賭けは俺の勝ちだよな。」

「：おう。お前強すぎ！！外れねーんだもん！」

「こうら！！加藤、朝原！さっきからうるさい！少しは黙らんか！」
山口が声を張り上げて怒った。ぐっさんが怒ると面倒なんだ。ぐっさんと言うのは説明しなくてもわかると思うけど山口のニツクネームだ。ぐっさんって言ったら怒るけど。

「すんません」

素直に謝るのも必須条件の一つ。「普段はバカやってるけど授業はマジメ」みたいだと先生からの好感度もUPってもんだ。俺の人生はみんなから信頼されることから始まる。って言うのもかなり大袈裟だけど…。

「朝原…君？合ってるよね？」

話し掛けてきたのは勿論桜木花音。

「あ？ああ。そういや名前言ってなかった？俺は、あさはらしおん朝原紫央デス。
ヨロシクオネガイシマス。」

一時間目は数学。またまたぐっさんが教壇に立つ。ぐっさんはSH Rのときはうるさいが、授業の時は殆ど注意しない。言っても聞かない生徒に対して無駄な労力を使いたくないのだろう。でも、うちのクラスは意外と静かだ。いつもバカ騒ぎしてるのに……。

残念ながらみんな勉強などしていない。意味不明な数式とぐっさんのお経のような声に嫌気がさして寝ているのだ。一時間目から寝るのはすごいと思うかもしれないが、それほどぐっさんの授業はつまらないのだ。

チラッと桜木花音の方を見てみると、かなりマジメに授業を受けている。こんな授業をよく受ける気になるな。

キーンコーン……

やっとぐっさんの授業が終わり、みんな目覚めた。

「ふああ……マジで良かったりい。紫央、フケねえ？今日の授業全部ウザイしさ。転校生楽しみにしてたけどもう、それも終わったし。アカリとか誘って行かねえ？」

「おっ、いゝね。」

アカリって言うのは俺らの連れで、クラスのリーダー的存在（女子だけ）だ。アカリが言うの大抵の奴はのってくる。

「朝原君たちどっか行くの？」

俺は桜木花音と目が合ってしまった。『しまった』の意味は余り無いけど。小動物みたいな目をしている。なけなしの良心もうずく……みたいなの？

「うん。サボリ。」

祐樹が答える。でも、納得いかなかったのかジッと俺たちを見ている。

「サボるな」とか言いたいのか？それだったらマジメスギかも。

「……」

何故か沈黙。言いたいことがあるならはつきり言え！

「一緒に行きたいな。」

そっち？ やっぱり変な奴だ。祐樹は喜んでるみたいだけど、俺は嫌だ。

結局祐樹の言葉で一緒に行くことになった。そのかわりにアカリ達は来なかった。

「ねえ、朝原君。毎日楽しい？」

唐突な質問。

「え？ めちゃくちゃ楽しいよ？ 見てて分かるでしょ？」

一瞬ドキッとしたけど大丈夫だろう。自分は楽しくないとかそういう系統だ。

「さっきちょっと見たただからわかんないけど…朝原君は楽しそうじゃなかった。みんなとワイワイ騒いでる時とか…目が笑って無かったよ。」

え？ っていう感じ。一瞬見ただけで俺の内の性格見抜きやがった。普通ありえない。笑ってなかったらネタがつまらないとか、めんどくさいだけとか思う筈なんだけど…天然かと思ってたけど案外鋭い勘（？）の持ち主かも…

「そう？ 最高に楽しんでるけど？ 目が笑ってないとか言うのは…地顔。じゃない？」

ヤバイかも。これ以上話すとボロが出そう。それは無いと思うんだけど。成績優秀の紫央くんに限ってそんなこと……

俺は考えるのに夢中で好青年モードを自動的にOFFにしていた。にこやかな笑顔は消えていった。

「朝原君、ちょっと嘘下手かも。」

そう言って桜木花音はクスッと笑った。めちゃくちゃムカつく！！こうなったらめんどくさい。必殺！開き直り！！

「凄いじゃん。桜木。こんな早く性格を見破られるとは思わなかった。このこと誰にも言うなよ？ しってんのはあんたと祐樹だけ。言ったら、怒るよ？」

こんな小さな始まり。俺は花音に心を開いていくようになる。

第2話 ヘタレの思い

「紫央、祐樹、おはよう。」

花音が転校してきてから約3週間。今日もまた彼女は俺達に明るく挨拶を交わす。そして、今日もまた彼女は傷を作ってやってきた。ここ数日、花音は毎日ケガをしている。何があったのかは知らない。花音が何も言わないから。

「花音、まあた怪我してる。何があったんだよ。」

祐樹がゲームをしながら聞いた。質問したにもかかわらず、「あつとか「うおっ」とかゲーム画面に向かって言っている。いったい何のゲームをしているんだ？

「えっと、あたし寝起き悪くて。いつもベットから落ちたりしてるんだ。」

テレながら言う花音。祐樹は「ふーん」と納得しているようだが、俺は違った。花音は嘘をつくのが下手だ。（俺もか？）花音にいたい何が起こっているんだ？この状態がずっと続いている。花音も花音で、何も言わないから困る。言ってくれりゃ俺も楽なのに……

誰かにいじめられてんのか？それとも本当にドジなだけ？それならどんなに楽か……

「紫央、おはよ。どうしたの？何かあった？暗いよ。」

暗い……誰のせいだと思ってるんだよ。でも、笑顔は絶やしてはいけない。花音の前でも。

「なんでもナイ。花音、悩みとか困ってることあったらなんでも言えよ。」

これが精一杯だ。花音が何も言わない限り何もできない。頼ってくれないのに勝手に動くのは迷惑でしかないんだ。

「……悩みなんてないよ。大丈夫だよ。」

花音がそう言うなら、そう思うしかないんだ。

「なあ、紫央。花音どう思う？あのケガの事…。」

俺と祐樹は、授業をサボって屋上でたむろっていた。いつものようにバカ騒ぎとはいかず、どんよりとした空気が漂っている。もちろん、悩みのタネは、さっき祐樹が言っただとおりで。

「わかんねー。多分誰かにやられてるんだろうけど……見当つかねーよ。」

俺はフェンスにもたれかかった。カシヤンと小さい音が響く。

「なんか言ってくれたらな。」

俺はずっと思ってることを言った。

「花音は優しいからさ、心配かけたくないってのもあるんだろうけどさ。やっぱ、『いじめられてる』なんてさ言えないじゃん。そんな弱い自分をみせたくないんだろ。あと、俺らに言ったら殴っちゃいそうだし？」

真面目顔をしていたが、すぐにいつもの顔に戻った。祐樹には真面目な顔は似合わないらしい。

俺はなんとなくわかった。花音の気持ち。

だからって放っておくわけにはいかない。それが、問題なんだ。

次の授業が始まってから約10分後に教室に帰った。しかし、教室には男子と極少数の女子しかいなかった。花音もいない。

「なあ、何でこんだけしかいねえの？」

俺は祐樹の前の席の奴に聞いた。名前は斎藤。いや、それはどうでもいい。

「辻たちが桜木を呼び出してんだよ。辻の取り巻きはみんな行ったよ。」

辻——？アカリのことだ。アカリが花音を——

「どこ行った？」

必死に迫る俺。授業妨害しまくりだ。教壇に立つ教師も怒っているらしいが関係ない。

斎藤が言うには多分、裏庭らしい。そんなものがこの学校にあったのか。

「祐樹！裏庭行くぞ！」

席に座っていた祐樹はめんどくさそうに立ち上がった。

「こら！朝原！！授業を乱しという勝手に出て行くな！！」

教師が何か言ってるが気にしてる暇なんかない。

俺たちが裏庭に行くと、アカリと花音がいた。その他の女子も。

「花音！！！」

一斉にみんなが振り向いた。視線が俺たちに集中する。

「あ…紫央…。」

アカリが震える声で俺の名前を呼んだ。でも、俺には傷だらけの花音しか目に入らなかった。ドロドロで、可愛い顔にも傷がいっぱい…

怒りが抑えられなかった。体が勝手に動いて、アカリを殴ろうとした。

「ストップ！」

祐樹が俺の腕を掴んだ。

「離せ！」

「まあまあ、落ち着いて。アカリに理由を聞こうぜ。」

俺は一旦腕を下ろした。もう、性格を偽ってなかった。本性むき出した。

何故かアカリが泣いている。

ムカツク。何でアカリが泣くんだよ。泣きたいのは花音だろ？俺だ

って泣きたいよ。ていうか自分がした事わかってんのか？花音をボロ雑巾みたいにして、許されると思ってんのか？

花音を保健室につれてった後、俺たちは屋上で話した。

「アカリ、何でこんなことしたんだ？」

祐樹が普段どおりに尋ねた。こういうところホントに偉いと思うよ。

「こいつが悪いんだもん。紫央に近付いて、親しくするから……。ずっと紫央が好きだったんだもん。許せなかったんだもん。後からきたくせに！！」

…花音がいじめられていたには俺の所為デスカ？俺と仲良くしてたから？ふざけんな。

「アカリ、てめえふざけんじゃねえよ。てめえの感情で花音が迷惑しただど？ふざけんな！！マジで殺す！！」

「紫央！落ち着け！！」

また祐樹が俺を止める。でも、止めてくれてよかった。じゃなきゃ本気でアカリを殺してた。

「おい、アカリ。俺はてめえなんか好きになんねーよ。てめえみたいな奴なんか大嫌いだ。」

「紫央？いつもと性格違うね。」

「……これが本性だよ。この性格に花音は気付いてくれたんだ。大切なんだよ。今度傷付いたら許さない。殺してやる。」

これで、一応解決した。アカリも反省してるようだ。多分…

俺は保健室で気を失ってる花音を見ていた。アカリ達はどんな風に花音をいじめてたんだ？気を失うまでよくやったな。

「花音、ゴメンな。守ってやれなくて…。これからは何があっても守るから。」

そっと花音の髪をなでた。指をくすぐる茶色い髪が心地よい。

「花音、俺、花音のこと好きだ。」

花音には聞こえないだろうが、急に告白したくなったんだ。
今度は花音が起きてる時に言わなきゃな。

第3話 涙の告白

俺は面と向かってじゃないけど花音に告白した。花音の意識があるときに言わなきゃいけないのはわかってるんだけど……。

ハア、自分がこんなにヘタレだとは思わなかった。告白したのを知ってるのは祐樹だけ。祐樹には何故か速攻でばれた。花音同様、祐樹も勘がいい。祐樹には散々バカにされた。

「何で寝てる相手に告白するんだよ。」とか……
ほっとけよ……。どうせ俺はヘタレだよ!!

「おはよう。紫央、祐樹。」

花音がいつも通り明るく挨拶してきた。俺も祐樹も同じように挨拶する。

俺がアカリにキレてからアカリ（その他の女子を含む）は近付いてこない。反省したのか、俺が恐かったのかわからないが、その方が楽といえば楽だ。

俺って惚れっぽいよな。まだ一ヶ月足らずでいきなり告白なんてさ。
（実際はしてないだろ）

「花音、今日さ放課後ゲーセンとか、カラオケとか行こうよ。」

祐樹がかばんを開けている花音に話し掛けた。朝一番の会話が放課後の事かよ。

「えっ今日？ゴメン。今日は無理なんだ。ピアノだから。」
「ピアノ？」

俺達2人は同時に聞き返した。初耳なんですけど……

でも、イメージがぴったりだったたりして……

「へえ、いいじゃん。」

素っ気無く相槌（？）を打つ俺。俺はこんなだったか？もっと、普

通の奴じゃなかったか？

「ゴメンね。」

俺は単独でサボってる。祐樹はぐっさんに捕まった。アイツの成績があまりにも悪すぎるからだ。1年のうちから赤点とりまくり。そのうえ授業はサボる。それはさすがにヤバイだろ。

もちろん俺は成績優秀！自分で言うのもなんだけど…。サボってても成績がよけりゃ教師は何も言わない。たまにぐっさんが「サボるな。」というくらいだ。

それよりも、俺こんな奴だったか？この頃好青年モードOFFだし

……

花音に係わってから？いやいや、それは考えちゃいけねえ。そんなこと考えたら俺の思いが行き場無くすことになる。

やっぱりまず告白か？それは関係ないか？

「しっおん君！な〜にブツブツ言ってるの？怪しくよ。」

その声の主は祐樹だった。

その言い方がかなり頭にくる。

「なんでも無い！お前ぐっさんの説教終わったの？」

「ん？ああ。だってもう休み時間だし、次、ぐっさん他のクラスの授業だし。」

またムカツク言い方を…

そんなときどこからとも無く『音』が聞こえた。

「ピアノの音だね〜。花音っぽくない？花音とか弾きそうだし〜。

紫央君見てきたら〜？花音ちゃん見たいでしょ？」

祐樹がひやかすように言ってくる。ムカツク！！…けど否定できマセン。めっちゃくちゃ見たいです。

「…うるっさいな。お前はエスパーかよ。いちいち人の心理をさぐ

るんじゃない。ねえ。」

そう言いつつ足が音楽室に向かう。祐樹の思うツボのような…

カラッ

音楽室のドアを開けるとやっぱり花音がいた。やさしい顔で穏やかな曲を弾いている。

「やっぱり花音だった。」

「あ、紫央。またサボってたね。屋上に居たの？」
音を奏でながら話す花音。

「…うん。そしたら音が聞こえたから。」

祐樹にそそのかされた事は黙ってしよう。笑われそうだし。引かれそうだし。

「そっか。今日、ピアノの日だから、練習してるんだ。」

ぴたっと音が止まる。花音が俺の方にやってきた。練習しててもいいのに。

「花音？どうした？」

「ん？別に。ねえ、紫央、お話しようよ。」

オハナシ？ちよっとドキドキ？平静に平静に。

俺たちは椅子に隣に並んで座った。俺は机に突っ伏しながら話を聞いた。突っ伏すなんていっても顔は花音に向けている。

「このあいだいじめられてるの助けてくれてありがとね。あんまり心配かけたくなかったんだけど。でもやっぱり嬉しかった。」

「あんなにいいよ。俺がそうしたかっただけだし。」

おいっ俺！愛想良くしろよ。素っ気無さスギ…

いや、俺何も考えんな！

「でもやっぱり辻さんかわいそう。ずっと紫央が好きだったのに……あたしが横取りしたみたいで……」

俺は顔を起こした。

あたしが横取り？もしかして俺のこと好き？

それは無いな。俺絶対バカだ。

花音は本気で悩んでいるようだ。やっぱり優しい。

それで自分が悪いとかよく言えるな。祐樹も自我を抑えられるし、花音も自分より他人のことを考えるし。

それに比べて俺はいいところなんか全然ない。性格を偽って、自分の居場所を確保して。それで独占欲が強くて……自分を守る為なら誰かを犠牲にする。

こんな俺、誰も好きになってくれないんじゃないか。

突然、そんな思いがよぎった。

花音が大切なのに自分を好いてくれないんじゃないか。そう思ったら何故か急に涙が溢れた。バカみたいに涙をこぼした。

「し、紫央？どうしたの？」

花音がオロオロと俺を見る。

俺は何も言わない。言えないんだ。言葉が見つからない。

花音はあきれたように俺の隣から離れた。

カタン

椅子を引く音がした。

そして優しい音がする。さっきと同じ曲。花音が弾いてくれている。

「この曲ね、カノンって言うの。あたしと同じ名前なの。すごく優しい唄。あたしはここまで優しくないけど、元気出して。何があったのかわからないけど、なんでも言ってみて？」

紫央が前に、『悩みや困っていることがあったらなんでも言えよ。』って言うてくれたみたいにあたしも力になるよ。だから、泣かないで。いつもみたいに笑ってよ。」

花音が笑った。

また、涙が溢れ出しそうだった。それを必死にこらえた。泣くと言えなくなるから。

「花音、好きだ。」

これだけしか言えなかった。精一杯の告白。断られるのはわかってる。覚悟はできてる。

俺はまっすぐに花音を見つめた。

「ホントに？ ありがとう。あたしも、紫央のこと好きだな。」

花音は小さい子をなだめるような口調で言った。

予想とは大きく違った答えだった。聞き間違いかと思った。

「嘘だ：俺なんか誰も好きになってくれない。」

「嘘じゃないよ。紫央。」

花音は俺にキスをした。

俺は軽く照れた。

そして俺達は付き合うことになった。

あとでかなり祐樹にひやかされそうだけど……

第4話 約束

「へえ、花音と紫央、付き合うことになったんだ。」

予想通り祐樹がひやかしてきた。三連休分のひやかしだ。

「なんだよ！」

「ヘタレの紫央君がね。」

「うるっさいっの！いいだろ、別に！」

ムカツク。反論できないのがまた：

「花音、こいつどんな風に告ったの？『ヘタレ』のこいつが。」

「えっとねえ…」

「花音！余計なこと言うな！」

俺は花音を怒鳴った。

「紫央、ヨカッタな。お前この頃いい顔してるぜ。あのときよりもかなりな。」

祐樹が肩をポンと叩いて教室を出て行く。祐樹は冗談とかで言ったんだろうけど、俺はだんだんテンションが下がってきた。

あのとき……。思い出したくないことだ。

「紫央、どうかした？」

花音がいつもの笑顔を俺に向ける。そうだ、俺には花音がいるんだ。テンションMAXとはいかないが、少しでも元氣が出た。花音はなんかバファリン（優しさでできてます）みたいだ（笑）。

「んーん。大丈夫。それよかさ、今日日本屋行きたいんだけど付き合って。」

ドサクサに紛れてデート（仮）に誘う。

「いーよ！」

またまた屋上で俺と祐樹は話していた。

「祐樹、花音に言うなよ？」

「そんなに嫌？あの時のこと…」

祐樹がニヤつく。俺は前髪をかきあげて上を見た。空は今にも大粒の雨をこぼしそうだ。

「当たり前だ。お前は違うのかよ。」

「ん、紫央のがやってたし。俺は」

ポツポツと雫が落ちてくる。

「そうだな。」

そんな時俺のケイタイが震えた。花音からだ。

『ゴメン今日一緒に帰れなくなっちゃった。ゴメンね。また今度行こうね。』

というメール。所々に絵文字が使われている。

「あゝ紫央くんフラれた。」

「約束キャンセルされただけだろ。」

「なあ、あのこと、気にしないでいいんじゃない？過去だし。ポジティブシンキング！！」

やっぱり祐樹はすごい。明るすぎて困るけど。

帰りに俺は、CD屋に立ち寄った。本屋は花音と行く予定だから、行かなかった。

CDを何枚か手にとってみるが、いい商品は見つからない。

諦めて帰ろうとしたとき、

ドンッ！

俺は余所見をしていたのか前にいた奴にぶつかってしまった。

「いてっ。あ、ゴメンナサイ。」

「余所見してんじゃねーよ！！って…紫央？紫央じゃねーか。」

聞き覚えのある声。でも思い出せない。もうボケてきたのか？

「誰だっけ？」

そう言ったら怒られた。

「ふざけんじゃねえ！俺を忘れんなよ！」

そう言われてもわかんねえんだからしょうがないじゃん。やっぱりボケか？ヤバイな。『脳を鍛える大人のDS』しないとダメかな（笑）。

「俺だよ。田嶋新だよ。」

田嶋新——思い出した。中学のときの連れだった。コイツと祐樹と俺でそこらを荒らしまくってた。学校の窓ガラスを優に10枚は割った。タバコも吸ってたし、警察にも連れて行かれた。その数は数え切れないくらいだ。これが祐樹の言ってた『あの時』だ。

新はかなり変わっていた。だからわからなかった。（つまり俺はボケていない！）

今、一番会いたくない奴なのに：

「紫央、今も暴れてんのか？俺、ウゼエ奴いるんだけど手エ貸せよ。どうせ暇だろ？祐樹も誘ってさ。」

「：暴れてない。毎日学校も行ってるし（殆どサボってます）。祐樹もちゃんとしてる。もう、あんなガキみたいなことしないよ。面倒くさいし。お前もいい加減止めれば？」

何気ない言葉だったのだが、俺は新を怒らせてしまったらしい。

「はあ？説教かよ。バカにすんじゃねえ。」

何故これで怒るんだ？説教なんかしてないし。バカにもしてないし。やっぱり頭悪い奴は嫌だな。理解力に欠ける。

「ウザイ奴がいるなら自分でやればいいだろ？それとも、一人じゃ何にも出来ない腰抜けか？」

「紫央！！テメエ殺すぞ！」

口が勝手に動く。怒るってことは凶星だろ：

「お前みたいな奴に俺が殺されるわけ無いだろ？」

その言葉で新はキレたらしい。やっぱりバカだ。暴力で全てを片付けようとするなんて。

俺は新の拳をしゃがんで避けた。新の拳は商品に直撃する。

「ヤバ：」

俺は新の腹にケリをかました。よろけた隙に店から走り去る。横断歩道を赤に変わるギリギリで渡る。そのまま走って、路地裏に逃げた。

新なんかすぐに倒せるだろうが、痛いのは嫌だ。

「何とか、撒いたか？」

嫌だなく。この先どっかで会ったらやられそうだし。

となると祐樹も危ないかもな。花音と一緒に居るときに会ったらー。

「えっ！新に会った！？しかも怒りを買っただど？フザけんな！！俺まで巻き添え食らうじゃん！紫央のボケ！！」

祐樹は俺をポカポカと殴った。軽く痛い。

「しゃーねえだろ？新が勝手にキレたんだよ。『ガキみたい』って言ったただけだ。」

俺は悪くない。あれだけでキレル新が悪い。……俺が悪いのか？

「何の話？」

ひょこつと顔を出す花音。ビックリしたあ。今日は花音は髪を二つにくくっている。

「このバカのせいで。俺らが中学のときつるんでた奴の怒りをこの『バカ』が買ったんだ！俺まで危ないの。怪我するじゃん。紫央のバカ！！」

何度も何度もバカって言いやがって！祐樹には絶対言われたくない言葉だな。しかも、花音に説明してたはずなのに、何でか俺に矛先回ってるし。

「その人強いのか？そんな人と一緒に居たのか？」

さすが花音。かなり痛いトコついてきます。

その質問には祐樹が答えた。

「強いんじゃない？中学ではかなり恐れられてたし。まあ俺らもか

なり…」

「祐樹！！余計なこというな！」

俺は気付いたら叫んでいた。それが、逆に、花音に不信感を抱かせるということを忘れて。

「もう、いいじゃん。花音は勘がいいし、いつかバレるんだから。」

「…そう、だな。俺から話すよ。」

花音は俺のこと嫌いになるかもしれない。でも、やっぱり言わなくちゃって思った。どうせ、隠せないし。花音を信じたい。

「俺と祐樹は、中学の頃はすごい荒れてた。」

「荒れてたのは紫央だろ？俺は別に荒れてないもん。」

祐樹が口を挟む。俺は無視した。

「それで、田嶋新って奴と三人でつるんでたんだ。俺達は手が付けられないほどだった。毎日、ムカついてた。うさ晴らしに、何人も殴った。（何人なんていう少数じゃないけど）窓ガラスを暇つぶしに全部割ったり、タバコだって吸ってた。警察に連れてかれたりもした。人は殺してないけど、間接的に殺してるかもしれない。

俺は、そういう奴だった。いや、そういう奴だ。今も、きっと変わってない。」

俺は真っ直ぐに花音を見た。花音も俺を見る。その目は『怯え』なのかはわからなかった。

「そっか。それ、すごいね。驚いた。でも、今はそんな人じゃないでしょう？毎日ムカついてるのかもしれないけど、人は傷付けてないでしょ？大丈夫だよ。ムカついたり、嫌なことがあったら、あたしに言って欲しい。ちゃんと受け止めるから。だから、もう、人を殴ったり、喧嘩しないで。」

花音らしい答えだった。花音は俺を思ってくれてるって自惚れてもいいかな？

「約束する。喧嘩しない。殴らない。」

花音は小指を突き出した。

「約束。」

子供みたいだ。

花音の指の温かさが体に染み込むようだった。

「なんだよ。俺のことシカトしちゃってさ。そこのバカカップル、周りのことも考えろ。」

祐樹が机に座ってブツブツと文句を言い出した。コイツはしつこいんだ。

「祐樹ウルサイ。」

「…紫央のバカ。」

またバカって言いやがった。俺は祐樹より頭はいいぞ？

花音が俺達を見て笑ってる。花音が笑うのはいいんだが、バカと言われてるところで笑われてるのは嫌だな。

俺と花音と祐樹、3人で本屋にいるときのことだ。本当は花音と2人で来る予定だったのに…。祐樹の奴、邪魔しやがって……

「なあ、新がいる。あっちの棚のほう。」

祐樹が小声で俺に告げた。

まだ問題は解決していないことを忘れていた。

「えっ！あいつが？本屋なんかにくるようになったのか！」

「そっちなよ！」

中学のアイツなら絶対にありえない。本どころか、マンガでさえ読まなかったのに。

「今日、一緒にきてよかった。」

「は？お前新がいること、予想してたのか？」

俺はちよつと祐樹を尊敬した。バカだけど勘はいいんだな…

「いや？お前らの邪魔しに来た。だって初デート（仮）は見逃せないし。」

……俺がバカだった。祐樹を尊敬してしまった。よく考えれば、祐

樹がそんなこと思うわけない。アイツの頭には楽しい事（俺の邪魔など）しかない。

「…祐樹、花音を安全なところに連れてけ。俺1人で大丈夫だから。」

「かっこつけんな。でも、花音が怪我したらイヤだもんな。その頼み聞いてやるよ。昼飯おごれよ？」

「…俺の方が痛い目に遭うのに、何で奢るんだ？お前は怪我しないんだからいいだろ？」

祐樹の理屈は不明だ。流石バカ！

「…そうだけどいいじゃん。紫央金持ってるし。（賭けで儲けた金）」

そういう問題じゃないだろ。

俺はもう何も言わなかった。

「んじゃ、紫央クン頑張ってるね。」

…かなりムカつく。

俺は、微妙に新に近付いた。

わざわざそんなことしなくてもいいと思うかもしれないけど、こういうことは早めに片付けた方がいい。この先ずっと狙われるなんて絶対嫌だ。

「新、また会ったな。」

「紫央！このあいだはよくも！表でろ！このあいだの続きだ！！」

「…ひとつ頼みがある。聞け。」

「それが、人にものを頼む態度か！」

無視、無視。こいつの話は聞くに堪えない。

「今回の勝負で、終わらせてくれないか？お前が勝っても、負けても。もう、こういうことはしたくないんだ。つまり、最終勝負？」
花音が傷つかないために。ついでに祐樹も。

「：いいぜ？お前とやったって面白くないからな。昔の連れのよしみだ。」

その理屈おかしくないか？まあいいけど。

「こいよ。紫央。」

新が挑発してくる。

「こういうのは弱い奴が先だろ？お前から来いよ。」

「なんだと！テメェぶっ殺してやる！！」

だからお前には殺されないって。

「うっ」

俺の腹にアイツのケリが入る。このあいだの仕返しか？

今のは避けようと思えば避けた。でも、俺は避けない。

「何で避けない！？お前なら避けただろう？手加減すんじゃねえ！」

「避けたら、お前怒るだろ？（変な理屈つけて）こっちは早く終わらせたいんだよ。」

それを言い終わる前に、顔面ヒット。これは痛い。

「紫央、打って来いよ！！」

「俺はやらない。約束したから。」

花音との約束が頭の中でぐるぐる回ってた。『喧嘩しないで。人を傷付けないで。』

バキッ

ドカッ

俺は何度も何度も殴られた。ケリもあった。鈍い音が聞こえる。

強烈なケリが俺の腹に入る。本日、5回目。

「ちっ、つまんね。無抵抗の奴これ以上やったらつまんね。」

「じゃあ、もう、止めれば？」

また俺の腹に足技が入る。

「言われなくても、終わりにしてやるよ。本気でやりたかったのによ！」

新らしい。

「気が…済んだ…のか？」

体中が傷だらけで、腹に5発入ったせいとか、うまく話せなかった。

「…ああ、済んだ済んだ。もう失せろ！ウゼエ。」

新は意外に優しい。基はいい奴なのに…

「じゃあな、紫央。昔のよしみだ。」

俺はこれからどうしろというんだ？歩けないし、携帯取れねーし。目の前が真っ暗になっていく。そのまま気を失った。

気がつくと、俺は病院に居た。当然と言えばそうなのだが。

「紫央クン、おはよう。」

目の前には祐樹がいた。

「祐樹…」

「新に呼び出されて、俺も参戦させられるのかと思ったら、紫央が倒れてんだもん。ビックリした。氣イ失ってんだもん。」

そんなとき、花音が入って来た。

「紫央、起きた？大丈夫？」

「花音、俺、殴ってないよ。殴られたけど、やり返してないよ。約束、破ってないよ。」

一番言いたかった言葉。

一瞬キョトンとする花音。

「…うん。わかってるよ。」

花音はニコツと笑った。まるで、わかってたとも言おうような、笑

顔だった。

「なあ、紫央、俺にお礼ないの？」

は？お礼？何の？あ、ああ色々だな。

コイツに言うのは癪だけど、言ってるか。

「…ありがとう。」

確かに言っただけど、もちろん、棒読みで。

「うわ、最悪。」

俺は、この後、何故かぐっさんに怒られることになる。俺はやってないのに。

ぐっさんの言い分によると

「他校の生徒と、誤解されるようなことするな！あと、CDショップの店員が、商品をダメにされた。と言っていた。誤りに行けよ？金持って。」らしい。

俺、悪く無いじゃん。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0601b/>

カノン～君といた日々～

2010年10月14日15時01分発行